人

内田作品ゆかりの人々

『孤道』完結プロジェクト
最優秀賞受賞

和久井清水氏

わくい きよみ：札幌市在住。

――今回は『孤道（こどう）』完結プロジェクトで見事、最優秀賞に輝いた和久井清水氏にお話を伺います。まずは『孤道』完結プロジェクトに応募しようと思った理由を教えてください。

『孤道』の完結編を募集していると知ったのは、古代史をテーマにしたミステリーを書こうと資料を集めている時でした。内田先生の作品の続きを、自分が書けるとは微塵も思っていなかったのですが、読み終わったときには応募することに決めていました。このわくわくする物語の続きを、ぜひ書きたいという気持ち、それは作品の持つ力のせいだったのだなあ、と今は思います。

――執筆するにあたって、一番大変だったことは何でしょうか？

なんといっても犯人はだれで、なぜ罪を犯したのかを考えることでした。『孤道』を何度も読み返し、頭が痛くなるほど考え、だんだんと時間がなくなっていく焦りで胃も痛くなりました。でも書くのをやめようと思わなかったのは、今考えても不思議です。書き終わった直後に、もっと時間があれば納得のいくものが書けたのではないかと思いましたが、同時にこれが私に出来る精一杯だったとも思います。全力を尽くした、とだけは胸を張って言うことができます。

――執筆中のエピソードがあれば教えてください。

昨年三月下旬、執筆は行き詰まっていました。そんな時に内田先生がお亡くなりになったことを知り、ますます進まなくなってしまいました。このままでは間に合わない、と悩んだすえに浅見光彦記念館へ行ってみようと思い立ったのです。私はそこで不思議な体験をしました。「頑張って書きなさい」という内田先生の声が聞こえたような気がしたのです。声だけではなく、気配も感じました。振り向くとそこには、内田先生の大きなお写真がありました。気のせいだと言われればそれまでですが、その後、俄然筆が進んだことは言うまでもありません。

――内田康夫という作家への思いや、作品についての感想を教えてください。

完結編を書くにあたって、内田先生の作品の多さと質の高さを改めて知ることになりました。ただただ驚きでしかありません。何十年もの間、小説を書き続けることがどんなに大変ですごいことかは、私の想像をはるかに超えています。先生がお亡くなりになった時、もうお会いすることもお話しすることもできないのだと、とても悲しかったのですが、本当にお会いしたら緊張でなにも話せなかったと思います。

――最後に内田康夫ファンへのメッセージがあればお願いいたします。

初めて訪れた浅見光彦記念館で、私は3215（ミツヒコ）ナンバーのソアラをカメラに収めていました。そんな私を見て、若い男性が「あ」と言って駆け寄ってきました。もちろん私のことは眼中になく、ソアラを撮りにきたのでした。嬉しそうに写真を撮っていた姿が忘れられません。初めて記念館に来られた方のようで、ファン層の厚さを知りました。私もファンの方々の末席に加えていただきたいと思います。

夫婦の、最後の
そして真実の想い

愛と別れ
夫婦短歌
内田康夫
早坂真紀
四月五日発売
短歌研究社

内田康夫が遺した浅見光彦シリーズ最後の謎
孤道 内田康夫
定価:本体740円(税別) 978-4-06-514996-6
3月15日 同時発売 講談社文庫
『孤道』完結プロジェクト最優秀作品
孤道 完結編 金色の眠り
内田康夫 原案 和久井清水 著
定価:本体720円(税別) 978-4-06-515072-6